小特集：地域研究と文化研究

三木直大

小説や詩、映画、絵画、彫刻、音楽など、ひとつの作品に研究者として向かい合うとき、私たちはそこに何を読み解き、何を見出そうとしているのだろうか。まず私たちは作品を一個のテクストとして、作品との対話をはじめる。しかし対話のためには、言葉がなくてはならない。その言葉は作品と向かい合う方法でもある。その方法によって、私たちは作品から受け止めたものを確認したり、曖昧であったものを浮かびあがらせたり、あらたな発見をしたりする。だが、その方法は同時に、作品との対話を制約するものでもある。何故ならそれは言葉によってなされるものだからだ。その言葉とは文字言語だけではなく、映像をはじめとするさまざまな様式を含むものであるが、ここではいわゆる文字言語として考えをすすめよう。

その言葉がもとづく方法がたとえばカルチュラルスタディーズやポストコロニアリズム研究によるものだとする。そのとき作品との対話は、アイデンティティ・ポリティクスを含むさまざまなポリティクスによっていろどられはじめる。もちろんそれを忌避するために、あくまでも何故映画なのか、何故文学なのか、何故絵画なのかに重点をおいて、作品との対話を継続しようとする方法もあるだろう。しかし、その対話も言葉によってなされる以上は、ポリティクスから免れることはできない。それが言葉の宿命であり、言葉による文化研究の宿命である。何故なら言葉とは、いまここにいる私たちの書くこと読むことの身体としての地域性であり、地域性を離れた単なる記号としての言語など存在しないからである。そして「翻訳者の使命」についてベンヤミンも言うように、具体的な諸言語を通じてしか、理想としての純粋言語も存在しようがないのである。

だから、そのポリティクスは、その作品が書かれた時空（地域や場所）、その作品が読まれる時空から、また逃れることができない。そこから地域研究としての作品との対話がうまれる。だが地域研究としての作品との対話は、

ややもすればその地域とは何かを考えるための資料に、作品を位置づけることを招いてしまう。作品のもつさまざまな個性は、それをかりに小さな物語となづけるとするなら、その物語は地域の大きな物語のなかに回収されてしまうことになりかねない。

とはいえ、その作品が誰によって書かれ、どこで書かれたかという意味において、地域という限定性をもたない作品はありえない。そして限定性をもつがゆえに、作品は普遍性にむかって開かれもするのである。なんの留保もなしに普遍的なものなど存在することはできない。それは記憶というものが、個人の記憶、家族の記憶、集団の記憶、国家の記憶、歴史の記憶というように、何重にも重なり合い階層化されているのによく似ていて、それぞれの記憶はどこかでズレを生じ、どこかで矛盾し、あるいは対立し、意識の底にしずめられる記憶をつくりだしもする。記憶とはたんに過去を覚えているということではない。それは様々な要素の中から、何かを選ぶことによって（何かを選ばないことによって）再構築される（生産される）ものであり、記憶とは想像し創造されるものだとされる所以である。作品はつねにそうしたポリティクスのなかにおかれている。そして作品を書く者も読む者も、また同じである。そのポリティクスをいかに意識し、いかに批評し、いかに乗り越えていくかが、作品との対話をかぎりなくたかめていくために必要なことである。

この「地域研究と文化研究」という小さな特集は、こうした問題意識のもとに組まれている。「阮慶岳短篇小説の構造と『台湾同志文学史』の政治学」は、作品論と文学史という問題について、「女たちの声に耳を澄ます」は、映画『終わらない戦争』を題材に歴史的な大きな物語と、その歴史の場に生きる女たちの語りのさまざまな位相に耳を澄ますことの問題について、それぞれ議論を展開していくものである。